遠江・山と里の民俗

会報　第019号

令和３年度に認定された「浜松地域遺産」

◆椎ヶ脇神社の神輿渡御（天竜区二俣町鹿島）

8月上旬の土曜日の午後に椎ヶ脇神社から猿田彦命を先頭に提灯・四神旗を立て神官・総代等が続き、神輿が屋台とともに町内を巡り、天竜川を渡って北鹿島地内の御旅所（通称「お祭り場」）に迎え、一夜を過ごされたのち、翌日同所から還御する。

◆浜松海岸の浜おり（浜垢離）（西区～南区）

舞阪町では、正月元旦、初日の出を前浜の海岸で拝み、波で洗われた清浄な砂をバケツに入れ、海水をお神酒壺に入れて持ち帰る。砂を家のまわりに撒き、地の神に供え、海水をナンテンの葉で撒いてまわる。これを「潮の花」といい、浜砂の持ち帰りを「浜下り」という。毎月1日と15日や、祭りの日も同様に行う。

篠原地区から五島地区まで類似する行事が残り、「浜降り」とか「浜垢離」と呼んでいる。

■旧井伊郷の地の神祭祀（北区引佐町～滝沢町）

◆西黒田の地の神祀り　◆狩宿の峰野一統の地の神祀り
◆谷沢のオシャグッツァマ　◆谷沢の加藤一門の同族祭り
◆滝沢の同族の地の神祀り

三岳山北西麓にあたり、かつて「井伊郷」の一部であった引佐町西黒田・同谷沢・同狩宿から、三岳山東麓の滝沢町にかけては、集落を開いたと伝わる本家を中心に分家も含めて原則名字を同じくする集団が地の神を祀る場所、あるいは菩提寺を参拝する。参拝の日は、正月、彼岸などさまざまである。今回は、五カ所について申請があり、一括して認定された。

◆令和３年度　浜松地域遺産

令和3年度末に浜松市教育委員会から認定された浜松地域遺産（浜松市認定文化財）は計91件、そのうち無形民俗文化財は4件であった。

なお、平成28年度から6年間の地域遺産累計件数は、総数で545件、そのうち無形民俗文化財は、42件となっている。

ほかの種別では、浜松の大菊栽培技術が無形文化財として初めて認定され、浜松凧の凧絵が有形民俗文化財に認定された。

◆西大山の初午祭（西区大山町）

毎年3月の午の日に行われる乗馬祭りである。初午祭が行われる白山神社は江戸時代まで隆盛を誇った大山寺の跡地にあり、隣接する西大山教会に安置されている市指定文化財「木造馬頭観音立像」も同寺にあった。

祭りの当日には、この馬頭観音像を祀り、神社境内を馬が練り歩き、地域の人々で賑わっている。

「万人講」公演

雄踏歌舞伎保存会「万人講」会長　坂田忠臣

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2年間中止となった第33回定期公演を、2年半ぶりに開催し、地元の人達に大いに喜んでいただいた。

「万人講」は、地域ぐるみで地域の行事として開催していたのとは違い、芝居好きな者が、一座を組んで奉納芝居や、地域の小屋で公演していたので、基盤は弱いものが有ったのだろうと推測できる。劇場も映画館に様変わり、とうとう「万人講」は、昭和27年を最後に途絶えてしまった。

「万人講」とは、江戸時代末期ころ、芝居好きの者がお金を出し合って講を組み芝居をしたので「万人講」といわれるようになった。近隣の村にも出かけて興行していたようだ。各地の神社や寺に奉納額が掲げられている。大正・昭和の初め頃は特に盛んで、町の芝居役者の追善興行石碑が今でも3本も残っている。

小さな村の芝居小屋「喜楽座」は、回り舞台・両花道・セリ・すっぽん等すべて備えていて、そこで素人歌舞伎が行われていたのである。

平成元年

雄踏文化センター完成を機に「万人講」復活の機運が盛り上がり保存会が発足した。しかし、義太夫・三味線・所作を教えられる人もすでに鬼籍に入り、豊橋から師匠を呼び、第一回公演を平成2年2月に開催し、それ以来、毎年1月に定期公演を開催してきた。

令和3年1月

第32回定期公演を開催する予定が、新型コロナウイルス感染禍で中止を余儀なくされ、令和4年1月の公演予定も同じく中止、次は令和5年1月、ところが、今度はセンターのホール修理のため、8月から翌年3月まで使用できないとのこと、いかにも間が開きすぎる。その間には、子供達も成長し、中学生も高校3年生になり、小学生も中学生となり、部活等で忙しくなっていたのである。子供たちにとっては、今年が最後のチャンス、それが中止となって大人も子供も皆がっかりしてしまった。

今年の春、新型コロナ禍も少し落ち着き出した。そこで、工事の始まるまでに何とか開催できないかと会場の使用状況を確認したところ、日曜日は、5月22日のみが空いていて、実施するならばこの日しかない。前日も他の団体が使用しているので準備も出来ず、いつもと違い色々と工夫が必要となった。何といってもこのコロナ禍を一番の念頭に、体制を整えて行かなければならなかった。

1、お客様が飲食を伴わないように開始の時間を午後1時半からとした。
2、商工会さんの協力による出店も取りやめる。
3、お客様の入場も半減し、
4、お客様の入場動線を一本にして、体調管理や消毒の確認を容易にした。
5、上演演目も減らした。
6、稽古も全員の陰性を確認してから開始した。
7、毎日の体調管理を確認記録した。
8、その他思いつくことは全て実施した。

大盛況の公演

開催まで短期間であって心配していたが、それはそれは盛況であった。お客様に非常に喜んでいただいた。

アンケートには「この時期に良く開催してくれた。感謝します」「コロナ禍の稽古準備等大変でしたね」等ねぎらいの言葉をたくさんいただき、勇気を出して開催して良かったとみんなで喜びを分かち合った。そして、出演した子供達も忙しい中、工夫して参加してくれたことは、今後にもつながってくれるとの希望を抱かせてくれた。

はるか眼下の天竜川
～瀬尻のぶか凧揚げ～

中日新聞記者　南拡大朗

浜松市天竜区龍山町の寺尾集落に伝わる「瀬尻のぶか凧揚げ」が６月初め、３年ぶりに行われた。天竜川をはるか眼下に見下ろす標高４５０メートルの急斜面を舞台にした凧揚げは、「凧銀座」と呼ばれた遠州でも独特の眺めだった。

■わずかな地形を生かす

初夏であっても、「寒いくらいの風が吹いてこないと揚がらない」と瀬尻ぶか凧保存会会長の宮澤宗男さんは言う。天竜川の水面に目を凝らし、白っぽく見えると風が来る前兆なのだそうだ。

同じ浜松市でも海岸部と違い、一般的に北遠の山間部は強い風は吹かない。それでも大きな凧が揚がるのは、天竜川が秋葉ダム上流の２キロにわたって直線になっており、そこから強い風が寺尾集落に向かって吹き上がるからだ。すぐ隣の集落では強風が吹かず、凧は揚がらないという。

平らな土地がほとんどない寺尾では、大人の男性10人近くが斜面の茶畑を上下に挟んで声を掛け合いながら風を待つ。今年一番大きな凧は幅３メートルほどで、何度かの失敗の後の午後にようやく揚がった。地元の人が「鯨」と呼んでいるフィルムテープを使った「うなり」が「ブオーン」という大きな音を発し、美しい人工林の上空をこだまする。

■口承では２００年

横に長いブカ型で、遠州の凧の会は浜北地区と共通の「ブカゴボチ型」に分類し、三ケ日や鷲津、新居の凧との共通点も指摘する（『遠州の凧と凧文化』）。正方形でベタ型の浜松まつりの凧とは異なる。

いつ寺尾で凧揚げが始まったのかは記録がないが、保存会の口承で少なくとも２００年ほどの歴史があるという。寺尾の節句は茶摘みの時期を避け、６月の初凧を揚げてきた。高圧電線の敷設されたことで１９５２（昭和32）年に中断し、１９７８（昭和53）年に復活して現在まで続いている。集落自体は現在６世帯が暮らし、保存会には他の地域に住んで寺尾に縁がある人も名を連ねている。

■一瞬の駆け引き

午前10時過ぎから小さな凧を揚げ始め、昼食を挟んで住民の人たちが和気あいあいと会話をしながら風を待つ。午後、誰が声を上げるともなく再開して大きい凧に取りかかった。

無事に揚がった後、放心して柵にもたれ掛かった宮澤さんの表情が忘れられない。山間で風を捉えられるチャンスは多くなく、心底ほっとしたのだと思う。特に近年、今年のように大きな凧を揚げられることはできなかったそうだ。保存会の人たちは、茶畑周辺の人工林の背が伸び、風の妨げになってきていると口をそろえる。ちょっとした環境変化でも条件は厳しくなるのだ。

江戸や明治の時代、大流行した凧揚げは大人の男たちが熱中しすぎたため、当局からたびたび規制を受けたという。現代でいえば、昼間からパチンコ店や競馬場に入り浸って仕事をしない人と同様、世間からある種冷たい目で見られていたのかもしれない。

時代は過ぎ、伝統的な凧揚げは保存・保護の対象となった。瀬尻のぶか凧揚げは昔ながらの素朴な娯楽であるだけでなく、現代人が忘れた自然との駆け引きの緊張感を伝える風習でもあると感じた。

編集・浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行・浜松市　電話〇五三-四五七-二四六六

山里の祝祭–神々と鬼たちの演舞についての展示記録

静岡文化芸術大学　准教授　田中裕二

展示の立ち上げ

小稿は静岡文化芸術大学のギャラリー（通称：西ギャラリー）で令和４年７月15日～７月20日まで開催された。開館時間は、10時30分～18時、６日間で759人の来場者を数えた展示の企画から実施までの記録を残すことを目的としている。

本展示は、同大学の地域連携演習という授業の一環で学生が主体となって取り組んだ成果である。学生が主体とは言え、参加した学生10人のうち９人が一年生、一人が二年生といった構成で、展示の企画から実施までの組立や必要なものまで初めて経験する学生ばかりだったため、私は展示の監修という立場で係ることになった。今回の山室集落の面や民俗芸能が専門ではないため、あくまでも展示をいかに実現するかという実務的なことに注力し、展示の内容については、同大教授二本松康宏先生、同大研究員宮嶋隆輔先生が監修という役割分担になった。

展示の準備と構想

５月12日（木）佐久間神社で初めて山室集落に伝わった面を学生と実見。そこで、展示を予定している面の実寸、面の裏側の写真を撮影させてもらった。実寸は展示ケースに入るかどうかを決めるため、裏側の写真は展示手法を検討するために必要であったため、記録用に撮らせてもらった。

６月８日（水）展示の方向性を決定するため、学生と意見交換を行った。ここで、現地で面を見た学生から、佐久間地域の浜松における位置関係をまずは把握してもらうこと、舞と面についてさらに調べるということが決まった。

６月16日（木）大筋の展示構成が決まり、展示図面に落とし込む。展示は大きく分けて三部構成にすることにした。

展示の構成と手法

先ず、佐久間の位置と簡単な歴史、佐久間ダムに沈んだ山室集落についての解説セクションを設けた。学生自身も浜松市中区にある大学に通いながら、今回の授業に参加しなければ知ることができなかったという実体験から、来場者に佐久間と山室の略史を理解してもらい、地理的に俯瞰してもらうことを目的とした。展示全体の背景を伝える導入展示と言える部分である。佐久間ダム建設の様子とダムに沈む山室集落を写真パネルと３分ほどに編集した動画で構成した。

次に、佐久間ダムの湖底に沈んだ山室で舞われていた舞を、離散していた集落の住人が佐久間神社に集まり、昭和50年代後半に舞った白黒写真が残っていたため、それを光沢紙Ａ４サイズに拡大印刷、スチール製のフレームに入れて20点ほど展示。山室の舞は正確な記録が残っていないため、貴重な写真である。最後は山室の面を11点、ケース内で展示。今回の展示で一番気を使ったのがこの面を展示するコーナーである。面の神聖さと厳かさを感じてもらいたかったため、このコーナーだけ照明をできる限り絞り暗めに設定した。展示手法で工夫したのは、面を三点だけ行燈ケースに収め、マネキンヘッドに被せてみたところにある。今回実験的にやってみた展示方法だったが、面が生き生きとしていたと、来場者からも好評を得た。

鬼の面と赤い衣装を纏った等身大のマネキンが殿を担った。複数お借りした鬼の面の中から、どの鬼の面を展示するか最後まで迷った。展示のクライマックスは、来場者の中に、まさに展示したその鬼の面を被っていた思い出を話され涙していたというエピソードにある。

何をどこに何点どのように展示するかは最終的に展示を企画する人間が決めるが、今回は面の力に導かれ、面の方から展示されることを望んだのではないかと思わされた瞬間であった。

小　括

今回の展示を通じて、記憶・記録・継承という三つの言葉を問いかけた。ヒトやモノにまつわる記憶や記録をいかに体系的に集めて、次の世代につないでいくのか、企画に係わった学生と来場者がともに考えるきっかけになったのであれば、学芸員冥利に尽きる。

佐久間神社や佐久間町、浜松市文化財課、そして浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会の関係各位から、貴重な資料の提供や協力がなければこの展示は実現しなかった。紙幅の都合上、お世話になった方々の氏名を上げることはできないが、末筆ながら感謝申し上げたい。